



たいしも通信

下関戦跡シリーズも4回目となりましたが、今回も相変わらずの脱線ぶりです、いよいよ太平洋戦争すら離れて、長府城について取り上げることとします。

自分はいわゆる外来種ですが、地元の方に聞いても不明な点が多く、かつ城の存在が短期間であったため資料も少ないようです。また、全体像をわかり難くしているのがお城本体、長府陣屋、そして勝山御殿の3つの関係でしょう。

◆櫛崎城

長府にあるから長府城、ですが実際には櫛崎城の方が一般的なようです。雄山城、長府陣屋と呼称することもあります。

場所は下関市長府宮崎町、関門海峡を望む要衝として周防灘に突き出した半島の高台にあります。現在は関見台公園となっていますが、実際の城域は公園よりもさらに北側の豊功神社付近まであり、松崎口・浜之坂口・三軒屋口に櫓があり、石碑がある付近が松崎口(大手門二重櫓)の跡とみられています。また、周辺に「お城山」や「詰の丸」などの地名が残っており、関見台は城の本丸で「お城山」とされています。

◆城の歴史

毛利氏以降の資料が多く見られますが、実際はもう少し遡り、長府観光協会案内板によると、『櫛崎城(串崎城とも書く)は遠く天慶三年(940)西海に勢力を振るった藤原純友の配下稲村平六景家がこの地に拠ったとも伝えられているが、確かな記録はなく、一応大内氏の重臣、内藤左衛門大夫景春が築城したものとされている。後、慶長五年(1600)の関ヶ原の合戦において、豊臣方に荷担した毛利氏は、防長二州に減封され、これにともなって、山口

に居を構えていた毛利秀元公が長府藩五万石の支藩としてこれを再築し入場、爾来、雄山城と称した。元和元年(1615)に徳川幕府の定めた一国一城令によってとりこわされ、隣接する県立豊浦高等学校の敷地に居館を置いた。(以下略)』とあります。

◆長府陣屋

城が取り壊された後の館が長府陣屋(藩庁が置かれた屋敷)です。その後約250年、長府藩の政庁兼藩主の居宅でした。幕末には城跡は砲台とされ、奇兵隊等が外国船の見張りをしていました。文久3年(1863)には長州藩の外国船砲撃に対して報復攻撃されています。陣屋跡は豊浦高校となり、遺構は残っていません。

◆勝山御殿

場所的に外国船からの攻撃目標になりやすいことから、その後、少し内部に入った所へ勝山御殿を築き避難しました。ここは三の丸、二の丸、本丸の3段構造で最上段には城主の居館があり、周囲に高石垣を巡らせ、手前には現在は埋められています。水堀がありました。その本丸玄関を移築して、現在は覚苑寺の庫裏(仏教寺院における伽藍(僧侶が集まり修行する清浄な場所))に再利用されています。

◆編集後記

長府城西側は現在は埋め立てられてしまいましたが、本来は岬の地形を利用した海城でした。また、櫛崎の名は元寇の際、モンゴル軍の首を海岸に埋めたことから「首崎」と呼ばれたのが始まりと言われています。城と陣屋と御殿の関係を系統立てて紹介すれば、更に観光客にもアピールすることができるのにな、と少しもったいない気がしています。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。